

コミュニケーションの成立基盤
——若者支援における身体性と場の生成——
南出 吉祥（岐阜大学）

はじめに

社会のいたるところで喧伝される「コミュニケーション（能力）」。その過剰なまでの圧力の問題性は言うまでもないが、他方でコミュニケーションは個別分断化されがちな社会状況に対抗し、他者とつながっていくための重要な回路としてもある。その両義性を超越していくためには、「コミュニケーション」をどのように捉え、いかなる実践を構築していくべきなのか。そのことについて本報告では、若者支援における若者たちの実情と実践の様子を題材にしながら、「身体性」と「場の生成」という回路に着目し、考えてみたい。

1. 〈声〉を奪われた若者たち

（1）社会規範からの呪縛と動けない身体

；「学校行かなきゃ」「働かなきゃ」という社会規範からの要請（※社会から排除されればされるほど、増幅する）と、それが適わない身体性とのギャップにより、自己否定が日々積み重なり余計に動けなくなってしまう苦しさ

（2）感覚・感情の抑制

；長期のひきこもり状態に置かれていた人びとの感覚・感情表出の弱さ
…上記の苦しさや自己否定の積み重なりから、自身の感覚・感情の感度を下げることにより生き延びるといふ防衛機制が生成されるという面と、感覚・感情を表現する手段と相手を奪われた状態に長期間置かれてきたことによる面と。

（3）身体性の回復・解放という支援

；「ただ走る」「声を出す」「色を塗りたい」など、社会規範に支配され硬直している身体をほぐし、解放していくという実践展開
…それにより、自己の身体の〈声〉（「疲れた」「お腹すいた」という感覚など）を取り戻し、「自分自身から発するニーズ」を見出すことが可能となる

2. コミュニケーション不安／不全

（1）過剰・過小なコミュニケーションと基本的信頼

；生きづらさを抱える若者において、自分自身でも收拾がつかなくなってしまうほど過剰に言葉を発してしまい、かえって他者に伝わらなかつたりすることもあれば、

うまく言葉を発することができず、他者に伝えられないままになってしまうこともある

…その背景には、自己-他者-社会に対する不安（基本的信頼の棄損）があり、精神的余裕のなさがある

(2) コミュニケーションの前提としての共通性（安心）と差異（刺激）

；未知への投企であるコミュニケーションが成立するための条件として、「この人に話しても大丈夫だ」「ちゃんと受け止めてくれるはず」という基本的な信頼と、自己と他者は違う存在であるという差異への了解という二つの次元がある。とりわけ前者が奪われた状態に置かれた者にとって、後者は自己を脅かす危険な存在となり、コミュニケーション場面からの忌避感覚を呼び起こす

(3) 「コミュニケーション」を必要としない場の設定

；上記の困難を抱える若者にとって、「雑談」という場面ほど恐ろしいものはない。そこで必要となるのが、「対話」（≡人と人との言語的やり取り）が前面化しないままに、何か作業をする（≡身体次元でのやり取り）など他者と場を共有できるような仕掛けづくり

…「作業」をしていくなかで、徐々に「共有」次元が増えていき、「身体」のみにとどまらない余剰から言語的やり取りも生じてくる

3. コミュニティ生成という課題

(1) 「他者に受け止められる」という経験

；どちらかという、個別相談（≡聴き取り）の過程で展開されることが多いが、社会的属性（できる／できないの指標など）ばかりで評価されてきた自分に対し、そのままの自分を受け止め受容されるという存在肯定の次元

(2) 他者と共に居られる場（居場所）の確保

；上記受け止めは、そのみだと一方的な依存を生み出し、共依存的支配構造にも転化してしまう。個別的な関係としての受容を、複数の他者とともに居られる場へと拡張していくことにより、「他者とともにある自分」を見出し受け止めていく次元

(3) 他者と共に創り出していく場の生成

；上記居場所の確保と連動する形で、その場自体の生成・運用に寄与していくという次元。スタッフからの促しや役割期待なども重要な契機となるが、そのコミュニティに内在する文化を介した周辺の参加の力によるところが大きい。

…そうした場における経験蓄積を元に、外部の社会への挑戦の模索が試みられたりもする

まとめ—コミュニティに宿る力としてのコミュニケーション

「コミュニケーション」は、発信・受信・メディア・コンテンツ・環境などさまざまな要素・契機が絡み合っ成立しているものであるが、分節化された把握で失われがちになるのが、そのコミュニケーションが成立している場のありよう、コミュニティの存在である。コミュニケーションとは、冒頭でも述べたように人と人をつないでいくための回路であることは間違いないが、その「人と人」は、どのような場に置かれているのか。その部分を問うことなしに、「関係」のみを取り出しコミュニケーションを問ってしまうことは、結局のところ個人還元主義的な関係論へと水路づけられてしまう。

本報告で見てきたように、コミュニケーションに困難をかかえがちな若者たちの背景には、まずもってコミュニケーションの出発点となるはずの「ニーズ表出」（そしてその土台としての身体性）が奪われていた。そしてまた、自己-他者-社会への基本的信頼（とそれを醸成する場＝コミュニティ）を奪われていた。それらの回復により、社会の中へ自己を位置づけ直すことが可能となり、結果として他者とのコミュニケーションも獲得している。

こんにちにおいて、これほど「コミュニケーション（能力）」が喧伝されている理由としては、それを醸成しうるようなコミュニティが生活上の諸局面から奪われ解体しているからに他ならない。ここで見てきたような場＝コミュニティの生成・回復こそが、個別化されたコミュニケーション把握を越え、他者とつながる回路としてのコミュニケーションを再奪取していくための契機となっていっくだろう。それをごく一部の若者への「支援」に留めることなく、社会全体における実践的営為として拡張していくことが必要である。